
The Abyss

森渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Abyss

【Nコード】

N9063N

【作者名】

森渚

【あらすじ】

三人の少女はアビスへと発った。

抜き取られた記憶を戻すため。

転生輪廻の輪に戻るため。

記憶を取り戻し

アビスを抜け出さない限り

彼女達に来世を生きる事は許されない。

窮地に立たされた少女達の冒険ファンタジー

―The Abyss―

基本的に明るい話です。

この小説に恋愛要素はありません。

とあるゲームシリーズと名前が被っている部分がありますが、全く関係ありません。

ハイファンタジーのつもりです。よろしく願いします。

P r o l o g u e

今、地獄行へノ片道切符ガ切ラレタ

アノ朱イ切符ガ切ラレタ

嗚呼、ナント恐ロシイ事ヨ

深紅ノ切符ガ

同ジ色ニ染マッタ手ヲ持ツ者ノ為ニ切ラレタ

嗚呼、切ラレタ
嗚呼、切ラレタ

ナント恐ロシイ事ヨ
ナント恐ロシイ事ヨ

ダカラ

アノ扉ガ開カレタ
重イ扉ガ開カレタ
黒イ扉ガ開カレタ

あびすへノ扉ガ開カレタ
あびすへノ扉ガ開カレタ

嗚呼、可哀相ナ小鳥達ヨ
嗚呼、息堪エタ小鳥達ヨ
嗚呼、失敗シタ小鳥達ヨ

キツト抜ケラレナイ

あびすノ世界カラ抜ケ出セナイ

嗚呼、可哀相ナ事ヨ

嗚呼、哀レナ事ヨ

嗚呼、悲シイ事ヨ

嗚呼、嗚呼、嗚呼

可哀相ナ小鳥達ヨ

罪深イ小鳥達ヨ

キツト逃ゲラレナイ

あびすカラ逃ゲラレナイ

あびすノ中デ悶^{もだ}エテ消エテイク

嗚呼、切ナイ事ヨ

嗚呼、可哀相ナ事ヨ

嗚呼、哀レナ事ヨ

嗚呼、嗚呼、嗚呼

ナント悍^{おぞ}マシイ事ヨ

一章：漆黒の扉―1―

私はただ一人歩いていた。続くのは暗闇。手には深紅に染まった切符が握ぎられている。ここは何処なのか、何故この切符をぎゅつと握りしめているのか、そもそも私が誰なのか、分からなくなっていた。すべて忘れてしまっていた。

たった一つ念頭にあるのは、この暗闇の先にある黒い扉に行かなければいけない、という事だけだった。何故だろう、そう自分に問うけれど答えは帰って来ない。当たり前だ。答えはない。いや、知らない。行かなければならない、という使命を本能的に感じ、それに従って、体がひとりでに動いているだけだ。理由という物は存在しない。

空色で丸襟のワイシャツについた大きい空色のリボンが規則的に揺れ、黒のショートパンツの下にある白地に青のストライプの靴下がちょうど膝をすっぽりと被ったまま微動だにせず、足首のところまである明るい青の運動靴の紐は足が前に進む度に上へと跳びはねているのと同じ。空色のリボンが跳ねているのにも靴下が微動だにしないのにも靴紐が上へ跳びはねるのにも彼らに意志はない様に、私が扉へ向かうのにも理由はない。体がひとりでに動いているだけ。こんな状況がまだ続くのか。そう思う。

続いていく暗闇のせいかな進んでいる様に感じない。しかし足が規則的に動いているのは確かだから進んではいるのだろう。ただ、淡々と、確実に。

いきなり私の足がぴたりと止まった。何なのだろう、そう思ったと同時に私は息を呑んだ。いきなり左右に両端に炎が二つ浮かび上がった。その明かりによって映し出されたのは大きな漆黒の扉。圧巻。そんな言葉がこの扉には似合っていると思った。

見上げて上まで見えず、横も炎よりもずっと向こうまで繋がっている。少し触れただけでは動きそうもない。けれども取っ手とい

えるような物や装飾はない。だからこそなのだろう。強い威圧感を感じた。

あまりにも強い威圧に驚きながらもじっと見つめていると、煌々と輝く何かが上からゆっくり下降してきた。その輝いているなにかはしだいに大きくなり、終いには私の目の前で止まった。そこでやっと気づいた。これは物ではない。小さな体にまるで紋白蝶の様な羽をばたつかせて、純白のワンピースをこしらえた少女だ。その少女は無表情でこちらを見据えていた。そしていきなり口を開いた。

「切符を見せて下さい」

切符と言われて私は先程からぎゅっと握っていた右手を開いてその少女に見せた。彼女は私からそれを奪う様にして取った。

続いて彼女は左側へ向かった。私がちらりと目をやると小さな少女の前に一人の少女が居た。彼女は長い金髪をふわふわとしたシュシュでまとめあげ、ふわふわとした膝丈のワンピースを身に纏い肩を露出していたが、ワンピースと同じ色をした先の広がった袖があった。綺麗だな、と思いながら見ていると彼女と視線が重なった。灰色のきりつとした瞳からは迫力と強い孤独感を感じた。どうしても怖くなった私が俯くと彼女は何事も無かったように前を向いた。すぐに小さな少女からちゃんと前向きなさいよと言われるとそっけなく悪かったな、とだけ言った。

そしてまた小さな少女は移動し、次は右側に赴いた。すると

「なんで最後に回ってくるのよ！ 私を待たせるなんて最低！」

と叫び声が聞こえてきた。なんだと思つて右に振り向くと、茶髪のロングヘアーにオレンジのポンチョを身に纏い、その下にオレンジと白のドレスの様な服を着た少女がいた。

「そんなのあたしの勝手よ！ 順番くらいでつべこべ言うなあ！」

二人の大声が耳に響くので、私は耳を塞いだ。耳を塞いでもよく通る声で二人がすったもんだを繰り返した末、やっと小さな少女が朱い切符を奪い取ると、私の目の前へ来た。

「ちよっと耳塞ぐのやめなさいよ！」

「ああ、ご、ごめん」

私は慌てて腕を下ろした。すると小さな少女はいかにも苛立っている様な面持ちで腕を組んだ。

「まず、言っておくけれど、あんた達は死んでいるの」

いまいちピンとこなかった。死んでいる。そう言われて信じられるだろうか。今、私には肉体が存在している。けれども、何故か自分が生きている様には感じられなかった。胸に手を当てればしつかりと心音がする。私、という温もりを感じていられる。だが、どうしてか生きていると思えなかった。不思議な違和感があった。

「はあ？ いきなり何を言ってるのよ。ちゃんと生きているじゃない。肉体だってあるわ。何かに触れる事だって出来るわ。冗談じゃない。変な事を言わないで！」

「同感。死んでいると言われても、こう、ちゃんとした肉体を持っているのだから信じ難い」

二人に挟まれてどうしたらいいか分からない私に右側から声が掛かる。

「あんただってそう思うでしょ？」

強い威圧感に押され、私はとりあえず頷いた。確かに信じろと言われてもいまいち信じられない。けれど何故かで自分が死んでいるという事が分かっている様な気がした。だから、本心、どんな反応をしているのか分からないのだ。

「あんた達って相当な莫迦なのね。その体は仮の入れ物。生前の入れ物の類似品なの。正しく言えば、生前の十八歳頃の体つきを模造したもの。いい？ 分からないとは言わせないからね」

とりあえずは私達は死んでいて、体自体は死んだ時そのままのものではなく、若い頃のものを似せたというのだろうか。

「どういう」

「質問、異論は認めないわ！」

右側の子はどういう事なのよ、と聞こうとしたのだろう。私もなかなか理解が出来ないでいるのだから、そう彼女が言う事は必然で

あろう。左側の子も分かっている様には見えない。

「それと、あんたたちにはこれからこの扉の先にある“アビス”と呼ばれる場所に入って貰うわ」

そう言っ、彼女はぼんぼん、と扉を叩いた。どうしてか、そう聞いても黙ってなさいよ！　とでも返事が来そうだったので、私は何も言わずに彼女を見つめていた。

「どうしてか、くらい聞きなさいよ。まあ、いいわ。話してあげる」
彼女はそう言うと言腕を組み直した。

「あんた達は生前大罪を犯した。それはもう、誰もが震撼するような大罪をね。だから死者を司る閻魔様はお怒りになられた」

「おい」

左側の子が彼女に向かって口を開いた。

「私が大罪を犯した？　身に覚えがないのだが」
小さな少女は無表情のまま口を開いた。

「当たり前。あんた達の記憶は全て抜き取って閻魔様が扉の向こうのアビスへ投げ入れたのだから。あんたたち、記憶がないでしょう？　それは記憶の殆ど全てが投げ入れられたからよ」

とりあえず、良く分からなかった。記憶がないのは扉の中に投げ込まれたから。そんな事言われても有り得ないとしか思えなかった。記憶には実体がない。それを放り投げる事など有り得ない。まるで夢のようだ。いや、これは夢だ。おかしな、非現実的な夢だ。

「あんた達、信じてないでしょ？　特に真ん中の銀髪眼鏡！」
びくり、として私はなんとなく首を振った。

「なっ何怖がってるのよ！　別に何もしないわよ！　ただ、あんた達が本当に死んでいるという事を信じさせるだけ」
はあ、と右側から溜息が聞こえた。

「で、どうやって信じさせるのよ。どうせ、夢でしょ？　はああ、早くこんな夢覚めないかしら」

「いいから、まず目を閉じなさいよ！」

そう、目の前で叫ばれたので私は言われた通り目を閉じた。

それから数秒経っても、私の目の前には暗闇が続いていた。けれど、不思議な感覚だった。逆さまになった状態で風を切っている感覚がするのだ。分かった。落ちている。私は落ちている。何故落ちているのかは分からない。

ただ、落ちているという事以外に分かった事はある。それは私の死ぬ間際の出来事だ、という事だ。そうだ、私はあの後、地面にたたき付けられた。ごつん、と凄まじい衝撃が頭から伝わって、気づいたら暗闇の中で歩いていた。ああ、私は死んだのだ。記憶が、与えられた記憶が正しいのなら、私は高所から転落して死んだ。

目を開けて左右を見ると、二人の顔は青ざめていた。二人もまた、死んだ瞬間を見たのだろう。

「どう？ 分かった？ あんた達は死んだのよ。あれはあんた達の最期の記憶。どんな記憶なのかあたしはアビスへの案内係だから知らないけど、そうとうだったんでしょね。みんな顔が青いもの」

小さな少女はからからと笑うと私達を凝視した。

「あんた達はアビスへ行くの。そうして残りの三つに分けられた記憶を探すの。アビスの中には沢山の危険があるわ。アビスはあんた達を呑もうとするもの。呑まれたら最後、あんた達は永久にアビスから出られない。転生輪廻の輪に戻れない」

鳥肌が立った。アビスという場所は私達を呑もうとする、転生輪廻の輪に戻れないなどと言われて怖くないと言えるはずもない。怖い。恐怖で何も口に出せない。辞退する、そう言ってしまうたい。「もしかしたら、底知れぬ恐怖を感じているかもしれないけど、あんた達に拒否権はないわ。その朱い切符を握った者はアビスへ行かなければならない。閻魔様の命令は絶対なのよ。どんな手段を使おうと逃げ出す事は不可能よ。大丈夫、安心して？ あんた達三人で旅をするの。三人で協力しあって旅をするのよ」

嘘だ。夢だ。そう言えたらどれだけ楽だろうか。しかしここは現実。死後の世界。あの記憶は本物。夢などと言える世界ではないのは最期の記憶を思い出した時に分かっている。

「ちょっと。何よ。何よ。何よ！　こんなのありえない！　夢よ、夢！」

「残念ながら、これは現実。あんたは死んだ。そしてアビスへ向かわなければならぬ。これは閻魔様の決定した事。誰も逆らえない」
小さな少女はそれと、と言って右側の子を指差した。

「あんたは、セフィネ」

そう言われた右側の子はあ？　と言って小さな女の子を睨みつけた。

「名前よ名前。で、左のあんたはリタ。銀髪眼鏡はフィル。名前は閻魔様からのプレゼントよ。ありがたく頂きなさい。後、」

そう言って彼女は朱い切符を私達に戻した。その刹那、金色に輝きだした。あまりにも眩しいので目を閉じた。しばらくして目を開けると、朱い切符が無くなったと同時に目の前には藍色の分厚い本が乗っていた。リタは背中へ背丈ほどの大剣を背負っていて、セフィは背丈ほどの杖を握っていた。

「これも閻魔様からのプレゼント。いいわね。あんたたちは三人でアビスの中を旅して記憶の宝玉を探すの。あたしが案内するのはここまでじゃあ、頑張ってね」

その言葉を聞いた後。少し経ってからの事だった。小さな女の子はふっといきなり消え、それと同時に炎も消えた。いきなり暗闇になり、周りが見えなくなった刹那、錆び付いた重い鉄の塊が動いた様な音がしたのだ。目の前にある扉が動いているのだろう。すぐに視界が開けた。

ちらりと見えたのは青い空に輝く太陽、沢山の木。美しいとはこの事を言うのだろう。そんな自然豊かな風景が広がっていた。アビス、と言われる場所は小さな女の子から話を聞いた時、洞窟の中でマグマが煮えたぎっていてじめじめと熱いイメージがあったのだが、そうではない事にほんの少し安心した。

けれどもそんな感動や安心感はすぐに削ぎ落とされた。扉が開き

きったのだろう、がたん、と音が鳴った時、急に風が私を包み込んで、落とそうとしたのだ。体勢を低くすれば、なんとか落ちないで済むだろうと思ったけれど、私の体は耐え切れず、扉の向こうの空へと投げ出された。

一章：漆黒の扉―2―

落ちた、と思うとすぐに木の枝にがさがさと音を鳴らしながらぶつかった。皮膚が数ヶ所切れたらしい。血が肌を伝う感覚がこちらから感じられた。そんな木の枝の密集場所が抜けると見えたのは地面。距離もそれなりにあるからまだ落ちるのか、と思ったその刹那、いきなり持っていた本がぱらぱらめくれだしたかと思うと、ページが青白く光だし、気づいたら私はふわふわとゆっくり下降していた。そのままゆっくり下降していき、足が地面に着くと本は発光を止めた。ふう、と息を吐くと目の前には二人がいた。

「ここは、何処なのよ!」

いきなり私に向かってセフィが睨みつけてきた。

「アビスっていう場所なんじゃないかな」

「そんなの分かってるわよ!」

「ご、ごめん」

彼女はまた私を睨みつけ黙り込んでしまった。私もどうすればいいのか分からなくて黙る。当たり前だ。いきなりアビスと言う世界に放り投げられて記憶を探せと言われても何の手がかりもない。その上森の中。あの小さな女の子の話もいまいち掴みきれていない。どうすれば、そう言われても分からない。私には何も分からない。

「もう、何よ。こんな森の中へ放り出されてどうすればいいのよ。」

もう絶望的よ!」

セフィがそう言ってしゃがんだ。私もしゃがみたい。泣きたい。だけれども、無理。してはいけない気がするからだ。

「なあ」

リタはそう言うのと腰に手を当てた。

「絶望的な状況くらい分かってる。とりあえず三分された記憶を探すにしてもあてがない。しかも森の中だ。だけど、ここで嘆いてもしょうがない」

きつとセフィがリタを睨みつけた。

「だからどうしろと言うのよ！」

リタがセフィを睨みつける。

「進むしかないって言いたいんだよ！ そのくらい分かれよ！ 何の保障もない事くらいあたしにだって分かるんだよ！」

「二人とも！」

仲が険悪になるのだけは嫌だった。避けたかった。最初が大切。ここで決裂してしまうときつと上手く行かない気がした。だから口を開いた。でも二人は睨みあっている。私の方を一瞬振り向いただけ。また二人で睨み合う。

「二人とも！ 止めてよ、睨み合わないでよ！」

「じゃあ」

セフィの瞳がこちらを向く。彼女の瞳には涙が溜まっていた。

「じゃあどうするのよ！ 記憶を探すにしても何のあてもないじゃない。あんたには何か考えがあるわけ？」

そう言われると言葉が出てこない。私はただこれ以上険悪な雰囲気になる事を避けたかっただけだった。ただそれだけを望んだ。だから出てこない。出せない。あてもなくさ迷うのは危険だ。けれどもここに留まっても何も進まない。何も、何も。進むべきだ。そのくらい分かっていた。けれどそんな事を言ったらセフィがどう思うだろう。嫌そうな顔をするに違いない。そう思うと言えない。怖いのだ。セフィがこれ以上怒る事が。

「答えなさいよ！」

きつと睨みつける彼女が怖かった。怖くて怖くてたまらない。言えない。進むべきだとは言えない。ならば思考を巡らすのだ。今、私がどうするべきか。どういう打開策があるか。そう思った時、手元の本が目映った。あの大きな剣や杖は身を護るためにあるもの。しかし本は何なのだろうか。それは分からない。もしかしたら地図が載っているかもしれない。だから本を開いた。そこには未解読であるルーン文字が並んでいた。しかし、読める。驚いた。すうつと

内容が頭の中に入っていく。呪文というものだろうか、言い回しがまるで古典文学と変わらない。この文章の中に何かないか、何かないかと探す。

「何やってるのよ、ってこれは何が書いてあるの？ 全く分からないわ」

「ルーン文字だと思う。文字の形からしてそうだから」

少しページをめくると文字が無くなった。白紙のページが文字の書いてあるページよりずっと多い。何かあるのではないか、と期待したがそうではなかったみたいだ。最初の数ページに呪文の様な物が載っているだけであとはない。そう思って諦めかけた時だった。文字が書いてあった。

「地図……ってことかな？」

私の手が躊躇なく文字をなぞる。不思議だった。初めて使うはずの本の使い方を私は知っていた。そんな気がした。驚いて、手をじっと見つめるとさっきと同じように文字が青白く光だした。あまりの明るさに思わず目を逸らした。

「わっ……な、何なんだろう」

「あんたが貰ったものでしょう？ 何なんだろうって何よ！」

「ごめん」

数秒して、私は逸らしていた目を本に向けた。すると、なにかが立体的に浮き出ていた。多くが緑色に染まっている中、所々が桃色や茶色、赤や白などに染まっていた。手で触ろうとするが、その物体は私の手をすり抜けた。

「な、何よこれ」

セフィの瞳からものはや涙はなく、その変わりなのだろうか、口が開いたままだ。

「良く分からないが、地図、のようだな」

リタも地図を凝視している。

「ねえ、この黄色い点って現在地かな？」

「知らないわよ！ そんな事よりこの地図。まるで世界地図だわ。」

広大すぎてこの森を抜けるにはあまり役に立ちそうもないわね」

でも、私がそう言った時、二人の視線が私へ向いた。当たり前のことであるのだが、いざ、見られるとどうしても怖くなってしまう。

「なんとかなるよ。ほら、地図が縦長だよ。で、黄色の点を現在地とすると、私達がいるのは地図の南端。だから、とりあえず北へ進めばいいと思う。それに、ご親切に方位磁針がついてるし、方位磁針によると、道はちょうど真北に向かってる。これならきつと進めるよ」

とたんにセフィの顔が赤くなった。きつと泣いて喚いた事を恥ずかしく思っているのだろう。

「そっそうね。ほら、早く行くわよ！　たらたらしてると許さないんだから！」

セフィはそう言うと言きだした。リタはセフィが少し先へ行った事を確認すると後ろを向いてにっと笑った。

「どうかしたの？」

「いや、セフィって面白い奴だなんて」

「どこが？」

私にとって彼女は気が強くてすぐ怒るイメージしかない。初対面だからだろうが。リタもそうであるはずなのだが、どこが面白いのだろう。私には理解し難い。

「からかったらすぐ怒りそうだな。そうじゃなくても怒りそうだが」

「か……からかったら駄目だよ？」

「大丈夫だ。暫くからかうつもりはない」

そう言ってリタは笑った。“暫く”という言葉に困りながらも私もつられて笑った。

「ちよっと！　遅い！」

いきなりセフィの声がした。声がした方を向くと、ずいぶん小さくなったセフィが背丈ほどの右手で握った白い杖を地面に差し、左手を腰に当てたまま立っていた。リタが私に行くぞ、と言ったので、私はこくりと頷いた。

一章：漆黒の扉―3―

結構な道のりを歩いたつもりであるが、永遠と雑木林が続いていた。その上、私の持っている地図の黄色い点は全くと言っていいほど動いていない。長い道のりを歩いたつもりだ。もう、疲れた。体が震え出す。足が悲鳴をあげだす。耐え切れない。

「ねえ、疲れたよ」

「え？　もう？　早いわねえ、あんた見た目とか男みたいだからもつとたくましいかと思っただわ」

「そっそうかな？」

確かに、二人と違って私だけズボンを履いているし、髪の毛も短い。それなりに身長も高めで、声もどちらかというと低い。一見男みたいだ、と言われても不自然ではないかもしれない。

「そうよ。その頭についてるリボンの付いた青いヘアバンドと胸元の無駄に大きいリボンがなかったら男だと思ってたわ。胸ないし」

セフィがそう言うとな度はリタの方に目を向けた。そして、にと笑う。

「まあ、リタは巨乳で美形だから見た目は申し分ないのに中身は男同然よね」

「悪かったな、男みたいで」

二人がそう言い争っているのをよそ目に私は自分の胸を凝視してみた。ない、と言っても過言ではない胸。触ってみても皮膚を伝って感じる事の出来るはずの脂肪の感触が全くと言えるほどない。

ちらりと見えるリタの胸。私と違って彼女の胸は綺麗な形をして前へ進む度に微かに揺れている様に見えた。ああ、本当にないなあ。自然に溜息が零れた。

「フィル。どうかしたか？」

ふいにリタに話し掛けられた。胸の事を口に出してはいけない様な気がして、何でもないよ、と答えておいた。

「そうか？ フィル。足が縛^{もつ}れてふらふらしてるから心配なだけ
れど」

なんだ、そっちか。なんだかほつとした。確かに疲れてきていて、
何度も転びそうになる。足がぼんぼんに張って悲鳴を上げている。
けれど、疲れたなんて言えるはずもない。

「大丈夫だよ」

私はそう言っ^てにこりと笑ってみせた。二人の足だけは引^っ張^っ
てはいけない。

「そうか。セフィは？」

するとセフィがいきなり足をぴたりと止めた。

「疲れたわよ。ヒールのせいで足はすごくむく^んでる。休みましょ
うよ」

リタは頷^{うなづ}いた。

「そうだな。私もへとへとだ。休みたい。フィル。休まないか？」
ほつとした。ずっと休みたかった。迷惑になったらどうしようと思
って大丈夫としか言えなかったのだが、こうなると、皆疲れてい
たんだな、と思えてなんだか居心地がいい。

「あそこに丁度いい岩があるわね。あそこで休みましよう」

うん、と言って頷^{うなづ}こうとした時には二人はすでに座^まっていた。

「フィル、遅い！」

「ご、ごめん」

とりあえず私も座ろうと思^ったけれど、岩の上は二人でいっ^ぱい
だった。私はしょうがなく岩の隣に座^まった。草が私の足を刺し、案
外痛い。

「あああ、足がばんぱんだわ。疲れた。なんか変な感覚がするのよ
ね」

「変な感覚？ 私は特に何も感じないが。フィルは？」

「私？ 私はね、するよ。すごく。違和感がありすぎて気持ち悪い
な」

「リタが変なのよ。まあ、そんな大きな剣を持^っていられるほど怪

力だから違和感も感じないんでしょね。ファイルもそう思うでしょ？」

いきなり私に話せと来たものだから驚いた。リタがきつと睨みつけてくる。取り敢えずどうしようもない、と感じた私はあはは、と笑って濁してみた。

「ほら、セフィ、ファイルが困ってるじゃないか」

「リタが困らせてるんじゃないくて？」

また言い争いが始まりそうだな。ついていけそうにないだろうし、それよりこの本が気になる。

地図以外のページを見てみたくてめくろうとしたけれど、途中で止めた。どうやら私の手が何かに触れたらしい、さっきより地図に詳細が載っている様に見える。縮尺が変わったみたいだ。さっきより載っている範囲が狭い。

さっき触れた右端に手を近づけようとした。するとなにやら青白く光るルーン文字が現れた。上には拡大、下には縮小と書いてある様だ。とりあえず、拡大と書かれたルーン文字に触れてみた。すると、地図はどん大きくなり、範囲が狭くなっていく。その真ん中には、常に黄色い点が施してある。これは、私たちの居場所を表しているのだろう。なかなか面白い。

私は立ち上がった。どうしても気になってしょうがなかった。だから周辺を歩いてみる。

「ファイル！」

セフィだろうか、リタだろうか。どちらの声か分からない。まあ、いい。まずはこの地図について知ってからだ。

足を動かせば地図の部分が動き、黄色い点は動かない。向きを変えれば、本に書かれているコンパスが反応する。面白い。仕組みが分かれば、この地図もさらに役に立てる。

「ファイル！ もう、何やってるのよ！ 聞こえてるの？ そもそも、耳はあるの？ 頭大丈夫？」

「あ、な、何？」

我ながらすごい言われようだ。私が何かしたのだろうか。あの様子からして、そうとう変な事をしていた様だ。セフィの顔が赤い。

「何回無視してるのよ！ しかも、何？ うろろうしながら気持ち悪い笑み浮かべて。ああ、寒気がする」

あまりの言われように酷いよ、と言う言葉が喉に引っ掛かって出てこない。口からは温暖な空気には似つかわない、冷たい空気。啞然というか、なんというか、妙に気持ち悪い気分。

「何よ、口半開きにして！」

「煩いな、セフィ。休養にならないだろうが！」

「フィルがその辺ウロウロしてた上に、気持ち悪い笑みを浮かべてあたしが話し掛けてるのを無視したのが原因でしょ？ 抗議するんだったらフィルにしなさいよ！」

「騒いでたのはセフィだろう」

「その原因を作ったのはフィルじゃない！」

「だからと言っても普通は、原因作ったフィルを責める前に、煩いセフィを責めるだろう？」

「普通は原因のフィルを責めるわよ！」

「ああ、もう、お前は本当に、煩い！」

「なんですって？」

ああ、また喧嘩が始まった。止めないと。

「あのさ、喧嘩は良くないよ」

二人の瞳が私の胸を貫いた様な気がした。ああ、暫く進まないだろうから、私は呪文の部分に何を書いてあるか、ちゃんと見ておくことにしようかな。

一章：漆黒の扉―4―



「ああ、もう、埒が明かないわ！」

リタの猛攻にやっとセフィが折れた。私はほんと胸を撫で下ろす。やっとか。あの二人がああ騒ぐと、呪文らしきものを確認するにも確認出来ない。

「ホント、リタと話すと腹が立つんだけど」

「ああ、そう。さあ、十分休んだんだから、そろそろ行こう。疲れも取れただろう？」

リタが立ち上がると、セフィは不服だとも言わんばかりの顔をしながら、リタのスカートの裾を引っ張った。

「ふざけないでくれる？ あんたのその口のせいで余計に疲れたわよ！」

「先に騒ぎ出したのはセフィだろう？ 自業自得だね」

「リタが挑発するのがいけないのよ！」

「あ、あのさ、二人とも」 喧嘩は止めてよ、と言おうとしたが、セフィの目に威圧感を覚えた。妙な恐さに口が動かない。結局空気に耐え切れなくて、目を逸らすと、リタの口が釣り上がっているのが目に入った。まだ続くのか。思わず溜息が出る。いや……分らない。どすん、と大きな音が近くで鳴った様な気がする。私達以外の第三者がいるという事だろう。リタも気がついたらしく、体を捻って、セフィから目を逸らしている。

「ああ、何よ、リタ！ 人が話してる途中じゃない！」

「静かに！」

「何よ！ 腹立つわ！」

「あ、あのさ、セフィ。ちょっと喋らないでいてくれるかな？」

「何よ、フィルまで……黙ってれば……」

セフィはきつといいんでしょ、と言いたかったと思う。けれど、それは出来なかった。遮られたのだ。またどすん、と音がしたと共に、見たこともない様な生き物が姿を現したからだ。

その生き物は人間の様で人間でなかった。肌は緑。体格は良く、この中では一番背の高い私でさえ、まるで小さな子供の様な大きさに感じてしまう。服、というよりは毛皮を纏っていて、右手には混紡が握られている。どうやら、鉄で出来た頑丈な物ではない様だ。鉄にしては、どうしても脆そうに見える。

「な、何なのよ……これ」

「緑の巨大生物……だな。フィル、この生き物が何か分かるか？」

「ううん、分かるけど、分からない。どこかで見た事はあるはずだけれど、分からない。デジャヴュ……かな？」

「はつきりしなさいよ！」

「そ、そんな事言われたって、良く覚えてないんだもの」

「なら、覚えてないって言えばいいでしょ！」

「ごめん」

「おい、二人とも、そんな茶番劇してないでこの変な生き物をどうにかしてくれ！」

「人任せにしようとしなide！」

「ちゃんと状況を見てから発言するんだな」

セフィから目を逸らしてさっき変な生物がいた方を見ると、数歩前に出たリタの身の丈と変わらない様な大きな剣と変な生物の混紡が重なり合っていた。当たり前ではあるが、リタの方が体格的には圧倒的に小さく、力も弱い。その為か、じわじわと後ろへ下がってきている。どうしよう。

「焰の塊よ！ ファイアボール！」

セフィの言葉と共に、変な生物の方……いや、リタの方へ焰の球体が飛んでいく。振り向いたリタはうわっと言うとそのままだがんだ。すると、リタの頭すれすれを通して変な生物の持っている混

紡に当たった。

「当てる場所を考えろ、セフィ！」

「頭に浮かんだ言葉を言っただけよ！ そしたら変なものが出てきたのよ！ 考えるも何もないわ。だいたい、混紡に火がついたんだからいいじゃない！」

「そういう問題じゃない！」

混紡は木だったのだろうすぐに燃え尽きた。だからだろう、今度はリタの元へ拳が落ちてくる。

「リタ！ 上！ 危ない！」

ちらり、とリタは上を見て、さっと剣先を緑の生物に向けた。すぐに、ざくり、と嫌な音が鳴る。そして、緑色の拳からは紅の液体が飛び散った。喚きながら変な生き物が剣から手を抜き、またぎゅっと手を握る。どうにかしないと。

勢い良く本を開いた。すると、さっきまでただ書かれていただけのルーン文字の塊の一節が輝いている。……これを読み上げればいいのか。きっとそうだ。

「力よ集え！ アームフォース！」

瞬間。妙な力が体の底から込み上げて来る様な気がした。

「何……この感覚。なんだか、何でも切り裂けそうな気がする」

「なんとなく分かるわ」

「……二人とも、どうかした？」

「私が術を唱えた直後から、なんだか力が漲みなぎってくる様な気がするんだ。リタは何も感じないの？」

「全く」

ヘンだな、そう思ったけれど、何かを言った所で緑色をした得体の知れない生き物がどうにかなるわけではない。今は押されっぱなしのリタを助けないと。

また違う文章が光っている。今度はこれを読み上げよう。きっと今みたいにもた何かが起こるに違いない。

「我が手に光の小刀を！」

手が光ったかと思うと、いつのまにか本が消え、小刀が手中に収まっていた。これならリタに加勢する事が出来るかもしれない。

変な生物に向かって走る。そして、刺す。硬いのかと思ったけれど、案外柔らかい。さあっと下に向かって小刀が下がっていく、それと供に大量の紅い液体が垂れ、私の服に飛びつき、柄から私の手へ腕へ伝っていく。呻き声がする。ああ、この変な生物の声か。聞いていてもつまらない。だから小刀を抜いた。そうしたら、その変な生物が腹を抱えてしゃがみ込む。戦意を感じられない。戦意喪失……か。でも、そんなもの関係ない。殺さなければならぬ。だから首へ手が行く。小刀から柔らかな肉の感触が伝わる。響く叫び声。口から強烈に臭う。けれど、それもどんどん消えていく。

気がつけば無くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9063n/>

The Abyss

2011年10月7日23時35分発行